

自閉的傾向のある幼児に対する外部専門家と連携した合理的配慮の事例

1. 事例の概要

本事例は、自閉的傾向（診断は無し）のあるA児（5歳児、3年保育）の事例である。3歳児クラスでは入園当初より一人遊びを好み、自分の好きなことを黙々と取り組み、友達に対して自分から関わる様子は見られず、クラスに馴染めないようであった。4歳児クラスになると、他の幼児に対して自分から関わろうとする姿は見られなかったが、保育者がA児の好きな絵本や恐竜の話をする時、時々笑顔で答える姿も見られた。しかしながら、周りを気にせず自分のペースで好きなことに取り組む一方で、何事においても周りから遅れがちであった。そこで支援の重点を「姿勢の保持や意欲的に身体を動かして遊べるように運動機能を高めていく」「他の幼児と一緒に関わることの楽しさを知り、自ら関わろうとする」として具体的な合理的配慮を行った。姿勢を保持することが困難であったため、這い這い競争やトランポリン、雑巾掛けやサーキット遊び等を自由遊びの中で取り入れるようにした。また、トランプやカルタ、すごろく等ルールのある遊びを通して友達と自然と関わるように配慮した。

キーワード 幼児、こだわり、友達関係、集団活動、視覚情報

2. 幼児の実態

A児はB幼稚園に在籍している5歳児である。4歳児クラスの1学期の終わりにアセスメントを取り、個別支援の対象となった。A児は積極的に戸外へ行く姿は見られず、室内遊びが好きで、数字や生き物の観察に興味がある。友達に自分から関わろうとすることはないが、保育者がA児の好きな恐竜の図鑑等を通してコミュニケーションをとろうとすると、会話ができたり、ルールのある遊びを取り入れると他の幼児とスキンシップを図ったりすることができる。好きなことに取り組んでいると時間の感覚がなくなり、次の活動に移れないことがある。保育者が呼びかけても応じず、自分のペースを保ち、好きなことに取り組み続ける様子が見られた。身支度の際にその手順について視覚的手掛かりを掲示して伝えるが、保育者が傍について最後まで見届けないと、途中でフラフラと歩き出し、床に寝そべることが多い。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B幼稚園のあるC市の保健センター及び療育センターの巡回相談員、大学の教員（発達・療育専門家）から対象となる幼児に関して具体的な指導・助言を得ることが出来る。更に発達・療育専門家が週1回程度の割合で来園し、発達の状況に関する所見と日常保育における留意点等について保育者に指導・助言する体制が確保されている。保護者を対象に、発達・療育専門家による相談会も設けている。【基礎2】
- B幼稚園では、複数の発達検査を用意し、必要に応じて大学の教員等が検査できるようにしている。クラス内には、A児の興味のある絵本や図鑑、他の幼児との関わり合いが持てるようにトランプ、すごろく等を用意している。【基礎4】

- 時間の経過が視覚的に理解でき、見通しが持てるように砂時計を用いている。活動や一日の流れ、次の活動への移行の際、制作時の手順等を伝える際に絵カードを用いて、分かりやすくそして見通しがもちやすいように工夫している。【基礎7】

4. 合意形成のプロセス

保護者からの相談を受け、A 児の在籍するクラスの担任より個別支援の申出があった。申出の内容としては、姿勢の保持が難しく、椅子に座ってられない姿や床に寝そべる姿、起立、歩行の際やスキップ等の動きのぎこちなさが見られること、更に自分の好きな事に夢中で取り組むが、次への活動の時間になっても気持ちを切り替えることが出来ないこと、他の幼児との関わりを持とうとせず、保育者との関わりを好む姿が多く見られることが挙げられた。その後、保護者と面談を重ね、園長を初め副園長、主任教諭、B 幼稚園内の支援保育コーディネーター（兼主任教諭）、発達・療育専門家と担任とで、A 児に対しての情報交換や個別支援計画の作成、支援の手立てを考え、保護者に具体的な配慮や支援を説明し、合意に至った。

5. 合理的配慮の実際

- 体幹を鍛えることにより姿勢の保持、正しい身体の動きができるように、遊びの中にトランポリン等の大型遊具での活動等を取り入れるようにした。また、他の幼児との関わり合いを増やすための集団遊びの設定や、A 児の興味のある事象を友達と話すことができるように保育者が仲介をした。身だしなみにも気付けるように鏡を見て A 児と共に考えてみたり整えたりするよう工夫した。【合理①-1-1】
- 大学の音楽療法専門教員による表現遊びや楽器遊びの機会を設けた。さらに、運動遊び専門教員による運動遊びの指導・助言により、遊びの中で楽しくかつ効果的な動きを取り入れる機会を設けた。【合理①-2-2】
- 「いやだ」「やらない」と、悲観的な発言をする場面が多い為、失敗を恐れず安心感を抱けるように言葉掛けを工夫した。【合理①-2-3】

6. 本事例の成果と課題

複数の発達・療育専門家の指導・助言により、保育者が A 児の特性の理解を深め、過ごしやすい環境構成、適切な支援方法を学び、実践することができた。3 学期後半になると、友達が見ている絵本に興味を示し覗き込み距離を縮める姿や、物事を手伝ってもらった際に「ありがとう」と伝えられたり、制作時に保育者が話す内容（A 児が興味のあること）をしっかりと聞くことが出来たりする様子も見られた。

保護者に対しては、担任との定期的な個別面接のほか、必要に応じて面接を行い、家での様子等を聞き、情報を得ることができた。保護者が A 児の対応について困っているような時は、園での支援の方法を伝えた。また、外部の発達・療育専門家による保護者との相談会を設けることで、専門家から A 児に対する支援方法の助言を行い、多方面から連携し、保護者を支援することができた。